慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	M・R・デービス、V・A・ルイス著『政治体系の諸モデル』
Sub Title	Morton R. Davies and Vaughan A. Lewis, Models of political systems
Author	霜野, 寿亮(Shimono, Toshiaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1972
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.45, No.8 (1972. 8) ,p.146- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19720815-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Morton R. Davies and Vaughan A. Lewis,
Models of Political Systems
Pall Mall Press, London, 1971,
x+182pp.

M・R・デービス、V・A・ルイス著
『政治体系の諸モデル』

一、政治学が厳密な意味での科学として成立するための要件は他の個別科学と同様に科学的な説明と予測にある。科学哲学の発達による触発を一因として発展した行動論的政治学が目指したのは、当然に政治学に厳格なる科学性を付与することにあつた。行動論的政治学はミクロな限られた範囲ではこの点にある程度成功していると言えよう。だが、マクロな水準ではどうであつたろうか。政治を巨視的にみて、科学的説明をするのは、換言すれば、政治の全体的かつ一般的な理論を獲得することである。だが、時間と空間をへだてた政治を説明でき、予測を可能にする普遍的理論を我々は未だ所有していない。今、我々が努力しているのは、科学的説明に至る準備段階としての分析枠組の構築である。そこでは、諸々の政治を比較するという視点が当然に強調されてくる。つまり、多様な政治現象を統一的に理解するための手続の確定は、政治学の科学性の確立に寄与する一踏台なのである。これを目標に多くの研究者が様々の立場から分析枠組あるいはモデルを提出してきた。もちろん、それらの意図は特定国家の研究をこえた意味での政治の比較研究を基礎づける枠組の構成にある。しかしながら、現在のところ、そのどれもまだ確定的な評価を受けているわけではない。これらモデル、及びその背後にあるものですら、厳密には理論と呼べるものではなく、また、比較のための枠組としての有効性についても多くを議論しなければならない現状にある。これらのうちの幾つかのモデルの検討を試みたのが本書である。その序論の冒頭において、「今日の諸国民国家における諸政治体系の比較分析を可能とする諸モデルを構成しようとして現在払われている努力に概観を与えるのが本研究の目的である」と書かれてあるように、本書は、これまでの諸モデルの紹介にほとんどが費やされている。

二、本書で扱われている諸モデルはすでに多くの機会に紹介されているので、以下ごく簡単に各章をみてゆきたい。本書は十五章からなり、(1)現代政治理論の胎動、(2)構造機能分析、一般体系理論、コミュニケーション理論、(3)政治体系の型、(4)権力、の四部に分れている。第一部の第一章と第二章は現代政治学の発生と性格についての記述である。現代政治理論は伝統的政治学に対する不満から発

生した。伝統的政治学に対しては、法的制度的視点を取ってきたという不満が向けられる。制度は反復される安定した人々の行動の型にほかならない。政治における人々の行動の形態や過程を考慮せずに制度にだけ注目するのは危険な視点である。また特定の国の制度だけを分析しているのでは比較の基準を得ることができないという不満が向けられる。政治には遂行しなければならない諸機能があり、それら機能の各々について、それを達成する諸制度が存在していると考えられる。この機能遂行の多様性という視点に注目しなければならない、という。

現代政治学の方法論上の基本的前提は次である。(1)理論とイデオロギーを分離する。(2)政治言語の論理的分析は、経験的理論の基礎としては不十分である。(3)科学性獲得の一手段として数学的および統計的手法を使用する。この前提の上に成立した現代政治学の最近における基本的な考えは次のようなものである。それはまず政治生活を体系として捉えようとする。その目的は単なる事実の羅列ではなく、様々なレベルで事実間の関係を明らかにすることのできる、体系的なかつ蓄積的な理論を構築する点にある。次に現代政治学は法則的立言の作成を目標にしている。人々の行動には、ある期間をとつてみれば首尾一貫性――これは法則的立言の基礎である――があると考え、その行動についてモデルの設定と理論の構築が可能であると考えるのである。そしてモデル構成にあたり、現代政治学では、国家という概念を使用せず、政治体系・役割・政治文化・政治構造・政治的社会化などの新しい概念が用いられている、としている。

第二部の序章である第三章では、G・アーモンド（第四章）、D・イーストン（第五章）、D・アプター（第六章）、K・ドイチュ（第七章）のモデルを検討する三つの視点――彼らが説明の必要ありと考えた問題・そのための方法と理論・その理論と方法は問題の解決に適しているかどうか――が示されている。アーモンドが試みた問題は、(1)政治発展についての理論構築であり、(2)政治体系についての類型論である。彼はこの問題に対し、均衡論的性格を批判しながら構造機能分析を用いている。つまり、これこれの機能が遂行されていなければならないとしたら、どの機構を通してこの機能は実際に果たされているかに、彼は注目する。この方法には体系の安定を維持させる過程を強調しやすいという批判がなされている。彼はこれに対し、この方法は逆機能にも注目するのだと述べる。そして、政治体系は機能遂行の様式によつて比較されうるという。

イーストンが自らに課した政治学の課題は、(1)具体的問題としては、環境の圧力の中で政治体系が持続してゆくためにどのようにしているかである。(2)政治生活を体系としてみる場合、その体系のライフ・プロセスを解釈するための理論体系の構築が理論的課題となる。彼は政治活動を生物体にも似たライフ・プロセスとして促え、自然科学の方法に似た分析方法で接近しようとする。つまり、政治体系は物理体系や化学体系と共通するもの――環境に対応し、また過程や構造を変化し、修正する能力――を有していると彼は考える。ここから、入力→変換→出力（→フィード・バック）という周知

のモデルが引き出されるのである。アプターの問題関心は伝統的な文化と社会の中で新興諸国の政治制度の転換がどのようになされたかという点から発している。この多様な転換形式の中に抽象化の作業を行なおうとするのが彼の理論的課題である。このために、彼は近代化の時期を通して、政府にその権威の持続を可能とさせる条件の検討を分析の目的とし、政府の権威とそれに対する支持の関係をみている。そして、(1)権威の集中化の程度、(2)権威者が固執し広めようとしている価値の種類によって、政府は分類されうるとしている。ドイチュの目的は、政治体系の存続と成長を説明し、変動の結果を予測するために、サイバネティクスの理論を利用することである。彼によれば、政策の遂行は習慣的になされていることになる。つまり、政治体系は、習慣形成の機構・情報を獲得し、選択し、蓄積する機構・獲得された情報に関連して規範を選択し、発展させる機構を有している。政治体系では情報が強制に先行するのである。このように、情報量と情報伝達機構が社会のそして政治の存在を計る重要な指標であるとなれば、政治体系はコミュニケーション・チャンネル網としてみられることになる。彼はサイバネティクス理論の中核であるフィード・バックの概念を活用して政治現象を説明しようとするのである。

以上の紹介のあと、第八章で著者達はこの四人の立場を次のようにまとめている。(1)四人の間に、政治が体系的に、および全体として分析されるべきだという一致がある。(2)アプターは政治の道徳的側面の分析を主要主題としているが、他はこれを二次的に扱っている。(3)アプターは除きうるかもしれぬが、彼らは次を主張する。政治の科学的理論は、すべての次元、すべての場所で適用されえなければならない。(4)イーストンとドイチュは社会科学と自然科学の架橋に力点を置いている。アプターは両者を異質なものと理解している。またアーモンドは構造機能分析に力点をかけている。

第三部の序章である第九章で、著者達はモデルについて語っている。現在、分類と比較のためのモデル・仮説・概念枠組は無数にある。各研究者が分類学者となってしまい、学者の数だけの分類図式があるという状態で、政治体系の比較に適切な概念・方法・アプローチについての同意は生れていない。だが、すべての所で、すべての時に、すべての分析の目的に役立つ枠組は確立されえない。できるのは、幾つかの視点から政治体系を比較し分類を可能にする分類図式にすぎない。それは常に、政治学の存在と共に修正されてゆくのである。そして、多くのモデルの中から研究者がどれを選ぶかは、研究者の特殊な関心や研究者の必要とする情報を最も良く生み出すものという点ばかりでなく、政治学の根本問題を研究者がどのように考えているかにもよるのである、としている。このあと、第十章では、伝統的社会構造の中で近代化を求める精神的活力が実現されてゆく仕方に注目して、E・シルスが作成した近代化途上国の五つのモデル——Political democracy, Tutelary democracy, Modernizing oligarchies, Totalitarian oligarchy, Traditional oligarchy——を紹介している。また第十一章では、政治体系の構造と政治文化に注目したアーモンドの、四つの政治体系の型——アング

ロ・アメリカン体系、大陸ヨーロッパ体系、前工業または半工業的政治体系、全体主義的体系――が概観されている。

第四部は権力についてであり、十二章は序章である。政治学にとつて権力の考察は重要であるが、その考察には種々の困難――たとえばその観察可能性――が伴う。また現在でも数多くある権力概念には混乱がみられるとしている。第十三章では諸政治体系を比較する、あるいはモデルを構築するときの一視点として、R・ダールが統制を考えていることが記されている。彼が比較のために構築した一つの枠組では、(1)政府の決定に影響を与える人の数、(2)政府が基礎づけられている権威の型、(3)全体の政治体系の中での下位体系の自律性と多様性、が基準となつている。また別の枠組では、全社会体系に見出される四つの基本的な社会――政治過程――Price system, Hierarchy, Polyarchy, Bargaining――を示し、これら過程間の差異に従つて現実の体系は分類されるとする。そして、ある社会に採用されたこれら過程がその社会の価値を実現するには合理的行為が要求される。そのためには、個人や集団が合理的計算ができると共に、必要な所では目標達成の際に他者の反応を統制することが必要である、としている。

第十四章では、勢力あるいは勢力者についての研究、および権力過程の研究が政治学の対象であるとしたH・ラスウェルについて触れている。彼は社会の中で人々が追求する価値を八つに分けている。また人々がいつどのようにして価値を得るかについての分析を配合的分析と呼ぶ。そこでは均衡と発展の概念が基本的である。均衡的分析は、価値の配分に影響を与える政治過程内の重要な要因の間の複雑な相互作用を確認することである。これに歴史的志向を加えたのが発展的分析である。第十五章では、第三部と第四部の分類について次の点が再説されている。一組の分類を構成する諸型は相互に排他的であり、また全事象をその諸型のうちに含み得なければならないのは初歩的要件である。重要なのは諸型を分つ基準が有用であり、かつ意味がなければならないことである。だがどの基準が有用で意味深いかは、多くの場合は個人的主観に左右されてしまう。さらにそれは研究目的にもよる、と述べている。

三、以上の極めて粗い紹介からも分るように、本書は多数の分析枠組について記述している。これだけ多くの分析枠組を一堂に集めて解説し、簡単ながら適切な批評を与えている点で、本書はすぐれた入門書としての評価を得るであろう。本書を読むことによつて我我は政治の理解への強い刺激を受けざるを得ない。研究者のこれまでの苦闘を伝え、新たに勇気を起こさせる力を本書は有している。しかしながら多くの研究者について語つていることが本書の短所と言えば言えるであろう。すなわち、ここで扱われた各々の分析枠組について、本書の解説からだけでは十分な理解を得ることができないのである。それは本書での扱いが各分析枠組を提示することに重点がおかれ、それが構築されてきた論理を追跡することに力を注いでいないからである。確かに本書では、各研究者が政治学の課題として何を捉え、これにどう対処してゆくかという角度から各々を解

説しているのであるが、それらは断片的でしかない。論理的連関を持つて読者に読まれるには困難であるように思われる。さらにまたこれら諸分析枠組の間の相互関係が十分明らかにされていない。本書の言うごとく分析枠組は研究目的に応じて多様に存在しうる。だが、この点を強く主張して議論を止めてしまうと、諸分析枠組を検討する意義が薄れてしまうことになる。それで、各分析枠組の守備能力と範囲、方法の類似点・差異点などについても、もつと突つこんだ指摘の欲しい所である。

もう一つ本書において不十分であると感じたのは方法論についての議論である。現在では政治学において比較の視点があまりに当然なものとして受け取られ、一方では様々な分類と枠組が、他方では一般的な体系理論の構築がなされている。政治学の現状をこのように理解して本書が編まれたことを考えるならば、機能への注目だけに止まらず、政治の理論形成における比較の位置、比較とは具体的にはどんな作業なのであるか、比較が可能となるにはいかなる要件が必要とされるのか、などの諸点について方法論上の詳しい解説をしておくほうが親切である。そうして多様な分析枠組を記述する本書の構成が深みを増してくるものと思われる。

（霜野　寿亮）